



廃校になった東裏小学校



## 廃校を活用した交流拠点づくり

### 当別町田園文化創造協議会（当別町）

札幌近郊の町、当別町。

中心町街から車で10分程の距離に活動の拠点である東裏集落がある。

そこで廃校になった小学校を核とした地域活性化の取組が展開されている。

#### 集落の灯である小学校の閉校

当別町は、札幌から車で約45分の都市近郊の町だ。昔は、町名（アイヌ語で「トウベツ」は沼から来る川の意）が示すように湿地が多い場所だった。それが、先人のたゆまぬ努力と土地改良の結果、米を中心に麦や野菜、花卉などを栽培する豊かな田園地帯に生まれ変わった。

当別町の集落の一つ東裏集落は、世帯数100戸程の水田地帯。幅の広い幹線防風林もあり、コントラストのある田園風景が美しい。

この東裏で、平成12年、小学校が閉校になった。「思い出の場所」を無くすことは「心のよりどころ」の喪失につながり、ひいては、地域の絆が崩壊することになる。当時の自治会長（後の当別町田園文化創造協議会会長）

は、強い危機感を持った。

一方、東裏では、農家であるこの自治会長が中心となり、亜麻を栽培していた。亜麻はその昔、当別町でも繊維用に栽培されていたが、今は全国的にもすっかり見ることがなくなった。そんな亜麻の抽出油が健康に良いことを見つけた会社から栽培を頼まれ、未知なる挑戦が始まっていたのである。

亜麻は初夏にうす紫色のきれいな花が咲く。「景観的に美しいこの亜麻と廃校となった小学校をうまく活用して、地域おこしができないか」。集落の会合では、徐々にこのような発言が聞かれるようになった。

#### 集落づくりを進める

##### 協議会の設立

廃校がいつまでも放って置か



亜麻祭りでは亜麻の紡ぎ体験



亜麻の苗の販売

れると集落住民の心が痛む。

そんな思いが通じたのか、平成20年、この廃校を札幌の家具職人が借りることになった。

広々とした体育館が使い、風情のある廃校はないか。様々な地域を探し回った家具職人は、東裏を訪れ、この小学校を一目で気に入ったのである。

これではずみがつき、東裏で何かイベントをやってみたくてという住民の気持ちがつとうとう「亜麻まつり」として開花した。この祭りは、全て住民の手作り。会場は廃校となった小学校のグラウンドで校舎もそば食堂に早変わりするのである。

「亜麻色の髪の乙女」のカラーオケ大会や亜麻の見学ツアーなど盛りだくさんのメニュー。祭りは盛況で、亜麻を地域内外にアピールする価値ある祭りになった。

そんな時、農水省で、地域づく

りを支援する事業ができることを知る。亜麻祭りを契機として、集落の活性化につながるうねりを生み出した。そんな思いから、集落の人たちは、町行政など

関係者と組み、「当別町田園文化創造協議会」を設立。『農・文化・環境そして人との融合』をテーマに活動することになった。

活動内容は、亜麻祭り、食育活動、木工教室など。目指すものは、地域への「誇り」を持ち、集落から出ていっても、帰りたいくなる魅力づくり。

まさに持続可能な集落づくりの一步を踏み出したのである。

### 育まれる集落のやる気

平成27年で8回目を迎える亜麻祭りは、来場者3000人以上の一大イベントに発展。国の

事業の活用が終わっても、農家や行政、商工会など多様な人々が協働し、地域に根付いた活動になった。

亜麻の波及効果は大きい。亜麻が咲く美しい風景は人々の関心を呼び、北海道の原風景として、懐かしむ人や写真愛好家など見学者が年々増加している。

亜麻を題材とした「亜麻フォトコンテスト」や亜麻のイラスト展の開催、亜麻の種子などを用いたお菓子づくりなど、様々な活動を生んでいる。

協議会の当時の活動である食育活動や木工教室なども発展している。食育活動は、廃校の給食室を利用して「マイ味噌づくり」と称し、町民に呼びかけ、地元の大豆で味噌づくりを行った。その活動が今、町内に味噌工房を作ろうという構想につながっている。木工教室は、当時、家具工



「マイ味噌づくり」



多くの写真愛好家が訪れる

房が中心となり、ベッドやイスを皆で作る活動を行った。それが現在ユニークな取組に発展している。

それは、小学生6名程がチームとなり、6日間にわたり木工の模擬会社として経営するもの。子どもたちは、木材を調達し、ターゲット（消費者）を決め、デザインを考え、販売価格を設定して販売し、収支決算をする。

チーム一丸となって、売約済の札を貼って、売れているように見せるなど、知恵を絞る。一度参加している子どもは、リピーターとなるなど、とても好評だ。

また、現在この廃校の教室を利用して、家具工場の代表の奥さんが、カフェを開いている。卵や乳製品、白砂糖を使わず、アレルギーの子どもたちにも優しいカフェとして、札幌などからのリピーターも多い。

この協議会の活動は、集落を活性化しようという住民の主体性を育てるという大きな効果があった。

そして、家具工房やカフェ、亜麻祭りの会場として現在も活用されている廃校は、新たな集落の灯になっているのである。



木のぬくもりがある、素材にこだわったカフェ



木工教室では子どもが活き活きと作業に取り組む



## 地域リーダー からのひとこと

次につながるありがたさ

当別町田園文化創造協議会 事務局長 辻野 浩

東裏小学校が廃校になったのが平成20年4月。

それから約5年間、農水省の補助事業を活用しながらこの校舎を核とした地域の魅力づくり運動を展開してきました。

私は当別生まれですが、この小学校の卒業生ではありませんので廃校活用計画に首を突っ込むのは地元東裏の人に対してちよつと抵抗がありました。でも純粋に良い校舎ですし、周りのたたずまいも素敵なのでこの廃校を核に人が集まれば良いなと思い活動してきました。

私が自分自身この廃校保存活動に一番貢献したと思っていることは消防設備の整備と外壁補修です。意外とハードなことですが。現在この廃校の中には家具工房「旅する木」、須田さんのアトリエとカフェがあります。その他、毎年7月に開かれる「亜麻まつり」にはこの廃校が展

示や亜麻グッズ販売所として利用されています。この手の建物は不特定多数の人が利用するととなると消防法のクリアが必要となります。

私と協議会の大塚会長はこの課題を自己財源を確保しつつ先ほどの補助金を活用しながら3年ほどかけてクリアしました。具体的には屋内消火栓と火災報知器、誘導灯の設置です。これにより消防から後ろ指を指されず活動する基盤ができました。

次に校舎のペンキ塗り。これには丸2年かかりました。夏場、ボランティアを募り休みの日に足場をかけ少しずつずらしながら刷毛やローラーで校舎のブロック壁を塗っていきました。時にはトラックを使って、時には高所作業車に乗り体育館の壁を塗りました。

こうやって手をかけながら大事なも



地道に校舎のペンキ塗り





生徒の思いが詰まった校内



のを大切に守ろうという気持ちだけは込めてきたつもりです。校舎の整備の他、本当にこの間いろんなことをやりました。味噌づくりやコンサート、木育教室、いもほり収穫祭、亜麻祭りなどなど。今は補助事業も終わりましたが、現在もスタッフとともに家具製作やカフェを通じて様々な活動を引き続き行っています。

それを見ると農村は農村らしく、どやどやと人がやって来たり、何かに追われて事業をするより、静かにゆったりした時間が流れるほうが似合っていると思います。

とはいえ東裏は黙っていれば集落機能が消えていく気配。そこに別な力が働き少しずつ新しい価値や希望が生まれるのが私の願いです。その願いはまんざら絵空事ではないと考えています。

キーマンは旅する木の須田さん。彼のエネルギー、情熱、粘り強さは従業員の心を動かしお客さんを魅了し、ひいてはちっちゃな文化あるいは新たなコミュニティ

ニティを創造する可能性を持っています。

10年後、旅する木の従業員数名が東裏に住み家族を持ち子供が増えその子供たちが学校の中で遊んでいる。そんな状況は夢じゃないと思っています。

須田さんの他にも教室を使って味噌工房や手芸アトリエなどができると楽しいし、それが実現したら地域の魅力に厚みが増すでしょう。

「当別町田園文化創造協議会」は「東裏小学校跡地利用研究会」が発端となり活動が始まりました。

地域の人の学校をなんとかしたいという思いが「文化は田園にあり」という活動につながりそして家具工房を通じた木育やカフェといった活動に引き継がれています。

つないでくれる人がいるありがたさを感じています。当別は札幌に近い。これからも東裏から田園の素晴らしさを都会の人に伝えられたらうれしいです。



辻野 浩さん

柔軟な発想で地域づくりをリード。手がける分野は多岐にわたる。



家具職人の須田さん



## 小さな農業（放牧養豚）の試み

### 鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会（鹿追町）

大規模畑作経営が中心である鹿追町。

グリーン・ツーリズムの先駆的な地域でもある。

ここで、放牧豚による小規模農業が試みられている。

#### 小さな農業への挑戦

大雪の山並と大規模な農地のコントラストが美しい鹿追町。アウトドアが盛んな然別湖を有する観光の町でもある。平成元年フアームイン研究会が設立され、本場ヨーロッパに学び、いち早くフアームインや農家レストランを事業化し、全道のグリーン・ツーリズムをリードしてきた。

農業としては、原料生産が主で農産物加工などの動きはあまりなかった。「大型農業一辺倒で、果たして地域は大丈夫なのか。」「何か特色のある加工特産品はできないだろうか。」グリーン・ツーリズムに取り組む仲間たちは話し合いを重ねた。平成19年、小規模でも加工を取入れた新たなスタイルの農業への挑戦が始まった。

#### 目指すは放牧養豚

グリーン・ツーリズムを中心とする地域づくりを企画・実践してきた北海道ツーリズム協会。ここが中心となり、商工会などにも働きかけ、豚肉の加工に取り組みことになった。有志が出資し「ポツクル」という会社を立ち上げ、加工品開発に着手した。しかし、どうしても納得できる商品ができない。また、どう販売するか計画も定まらない。技術も戦略も甘かった。まさに暗中模索。メンバーの意欲も失いかけてたそんな時だった。たまたま幕別町の農家が行っている「放牧養豚」を見学する機会を得た。放牧養豚とは、文字通り豚舎で飼育するのではなく、1年中放し飼いで育てるものだ。そこで飼育されている豚は幸せそうに生き生きしていた。肉を試食させてもらおうと、その弾力の



放牧豚は、生き生きしていた



とても人気のツリーハウス

ある肉質とジューシーな旨味に驚いた。まさに幸せな豚は美味しかったのだ。丁度その時、地域づくり活動を支援する農水省の事業が目にとまった。この事業を活用して再スタートしよう。メンバーの思いが一致した。そして、取組を根本から練り直した。

取組の柱が決まった。「普通の豚」ではなく「放牧」にこだわらる。そして規格外で捨てられる農産物を餌として利用し、資源循環型の脱抗生物質、脱輸入穀物飼料による飼育を目指すことにした。

### たくましく魅力的な放牧豚

平成21年、「鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会」を設立。北海道ツーリズム協会を中心に町や町内加工事業者など

が参画した。「そんなことをやって上手くいくのか」。廻りの農家からの冷ややかな視線を感じながらの再スタートだった。

初年度仔豚を購入し、早速放牧してみると、これが大変。それまで豚舎で飼育されていたせいか、足がフラつき走ることもままならない。しかし、1ヶ月もすると『野豚』になった。広い放牧地を走り回り、そこから地面を掘り起こし、放牧地は穴だらけになった。冬を迎えた。冷

え込む寒さが心配。でも、予算がなかったため、板などで簡単な囲いを自前で作ることくらいしかできなかった。それでも豚は逞しく逆境を乗り越えマイナス20度以下でもシバレ死ぬことはなかったのである。餌は長イモや小麦のクズなどの規格外農産物やファームレストランの

残渣物など。中々贅沢だ。豚は順調に育ち、12ヶ月で150kgを越えるまでになった。肉にしてみたら、これまでにない美味しさ。肉質がしっかりとっていて肉本来の旨味がある。脂身がスツキリとした甘みで、口の中で溶けていく。これで行けると手応えを感じた。



厳しい冬も乗り切った



## 苦勞した豚肉加工

予期せぬ事態が起こった。放牧豚の肉の加工にこれまでの技術は通用しない。豚脂の融点が低いのだ。融点の低い豚の脂はサラサラして口どけが良いのが特徴だ。放牧豚は、その飼育方法などからか脂の融点が低くなったのだ。これまで積み上げてきた加工技術は脂の融点が高い豚肉用。また一から技術を創り上げなければならなくなった。

大学の新卒者を加工技術者の正職員として迎えた。そして、元日本ハムの加工の専門家に依頼し、厳しく鍛えてもらった。2年経って一人前に成長しハム、ソーセージ等商品も揃ってきた。少しづつであるが売れ始めてきた。しかし、早く国の補助事業などに頼ることなく自立しなくてはならない。まだまだ経営の見

通しが立つまでにはほど遠かった。

取組体制を刷新することにした。加工を行う会社ポックルを株式会社「草原の風」とし、役員体制を改めた。これまで町民用の研修施設を間借りしていたが、町も応援してくれることになり、専用の加工施設を建設してくれた。そんな中、折角一人前に育った加工技術者が実家の都合で辞めることになった。これは、また一大事。今回の二の舞を踏まないよう地元出身の者を加工技術者として育てようということになった。加工技術者は国家資格が必要。通常2年に一度資格取得の講習、試験が行われる。必死に勉強してもらい、地元の仲間が晴れて資格試験に合格。度重なる困難を乗り越え、やっと継続して取組ができる状況が整ったのである。



加工施設の「草原の風」





「草原の風」の商品は、ふるさと納税の感謝特典としても好評

## 大きな可能性を

### 秘める放牧養豚

昨今、全国的に大きな注目を集めている「ふるさと納税」。この納税の返礼品として「草原の風」の商品が使われることになった。とても好評で販売が伸び、生産が追いつかないほどになってきた。だが、ふるさと納税もいつまで続くか分からない。協議会メンバーは今のうちにリピーターになるお客を増やすなど、経営安定化に向け真剣である。地元の高級ホテルの料理への使用やネット販売等様々なチャンネルを駆使し販路拡大を行っている。平成27年度の目標にはまだ少し届いていないが、あと1年頑張れば自立できる目処も立ってきた。一度この肉を味わったお客様はその美味しさに感動しリピーターになってくれるため、大きな可能性を感じている。

じている。

しかし、現在仔豚が中々手に入らない状況で、今後のことを考えると繁殖を取り入れることが必要になっている。放牧養豚は通常の豚肉としては規格外であるため、市場での価格は最低にランクされる。どうしても加工とセットで行う必要があるのだ。まだまだいろいろと課題があるが、きっと協議会メンバーが一丸となって知恵を絞り答えを見つけていくだろう。

協議会のこの取組は農業における一つの可能性のあるモデルとして、農村で新たなライフスタイルを求める人々への魅力的な提案になると思う。経済的な豊かさばかりでなく、人生の豊かさを田舎暮らしで実現できると。



美味しそうにできあがったベーコン

## 地域リーダー からのひとこと

### 「地域づくりの主役は民間で」鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会に至るまで

鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会 事務局長 武田 耕次

#### 協議会設立への思い

鹿追町での民間団体による地域づくりは25年以上の歴史を持っています。その中心となっているのがNPO法人北海道ツーリズム協会です。1990年に鹿追町ファームイン研究会が設立され、2000年に現在のNPO法人に活動が引き継がれたものです。グリーン・ツーリズムを全国で初めて地域として事業化に取り組みました。さらにその活動を発展させ、地域資源を徹底的に活かした観光資源づくり、地域産業に貢献できる新たな事業づくりに取り組むなど、20数年にわたって個人事業の起業やツーリズム協会自体の事業を15以上創出してきています。

私はファームイン研究会の設立当初からツーリズム協会にいたるすべての期間に関わり、事務局長として活動し、現在は

NPO法人の理事長として活動しています。

今回のテーマとなっている鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会による「放牧養豚と加工事業」を核とした地域活性化の取組も、実はこの流れの一つとして捉えています。つまり、地域としての課題は何か。解決すべき課題は何か。その解決のためにはどのような手法を考えるのか。また、誰と一緒に行動するのかを考え取り組んできた結果なのです。

#### 地域づくりの理念

北海道ツーリズム協会として長年地域づくりに取り組んできましたが、次の4つの理念を掲げ、常に立ち返るようにしています。



「大草原の小さな家」



グリーン・ツーリズムを皆で勉強



「ミヤバイワナ」

- ① 地域の活性化は地域が主体で企画立案し、計画、実行する。
- ② 地域のあらゆる資源を活かす。
- ③ 事業化を目指す。
- ④ 「地域おこし」は「自分おこし」  
私たちの活動の全てがこうした考えに基づいています。

### 理念に基づく取組内容

北海道ツーリズム協会の中心的事業は現在、然別湖グレートフィッシング事業（然別湖ミヤバイワナ遊漁管理Ⅱ 鹿追町からの受託事業）ですが、この事業は鹿追町が直営実施していた2004年以前、ミヤバイワナ（固有種・準絶滅危惧種）は、絶滅の危機を繰り返しながら町としての財政支出が多大な大きな荷物になっていたものです。資源の保護をしつつ観光資源化（釣）する提言を鹿追町に行い、2005年から委託を受けたものです。現在までに町の重要な観光資源化に成功し、資

源を回復させ、経済効果としても当時の50倍以上にまでなっています。

地域で問題になっている課題に対し、積極的に解決策を提言していくことは、私たちの使命と考えています。自らの頭で考え、地域資源を活かし、それを事業化することに全力を注いできました。こうした取り組みの一環として新たな産業、加工事業をつくり上げるとい目標に向かって鹿追町地域資源活用ふるさとづくり協議会を設立し、放牧養豚を核とした加工事業による新たな事業の創出、雇用の場づくりを目指してきました。

数年間の継続した取組の結果、経営の自立化の見通しが持てるまでになつてきました。国の支援事業、町からの支援、そして地域の温かい理解のもとに今日の協議会の成果を挙げるこ

とができたことに感謝しています。



武田 耕次さん

北海道におけるグリーン・ツーリズムの草分け的な存在。  
豊富な知識で起業をプロデュース。





西神楽の田園風景



## 住み慣れた土地で安心な暮らしづくり

### 西神楽エコ農村共生対流推進協議会（旭川市）

35万都市旭川市の郊外に位置する西神楽地域。

高齢化などの波は、逆にこのような都市に近い地域に顕著に訪れる。

そこで、安心な暮らしを確保しようと冬季集住・二地域居住などの取組がスタートした。

#### 歴史と文化が薫る西神楽

起伏に富んだ丘陵地が広がる西神楽。小高い丘から眺める田園風景がとても美しい。車で20分も走れば、百貨店が建ち並ぶ旭川の市街地に着く。西神楽は、まさに農村の心地よい環境と都市の利便性の両方を享受できる地域なのだ。

明治時代、西神楽からほど近い場所に皇室の離宮を建設する構想が持ち上がった。その場所は、現在上川神社があり旭川一円を見渡せる眺めの良い場所である。当時、北の都としての立地条件が最適だと判断されたようだ。西神楽も皇室御料地として編入された。しかし、残念ながらこの構想は札幌の反対などがあり立ち消えとなった歴史がある。

西神楽は、全国から集まった多くの入植者の手により開拓され

た。その子孫であり富山県から移住した獅子舞匠が故郷の芸能を伝承し、現在神楽獅子舞として地元の子どもたちなどに引き継がれている。

このような独特の歴史や伝統文化が息づく西神楽。ここで、全国にも例のない安心な暮らしづくりの取組が行われている。

#### 活動の手法は

##### グラウンドワーク

西神楽の地域づくり活動には、大切にしている手法がある。それは、住民・企業・行政がパートナーシップを組み、地域環境の改善を通じて持続可能な地域をつくること。このような手法をグラウンドワークという。グラウンドワークはイギリスの発祥だ。1980年代初頭、イギリスでは地域の活力が衰退



洪水で土砂に埋まったパークゴルフ場を住民で復旧



人で賑わうパークゴルフ場

し、環境の悪化が懸念される状況になった。行政主導ではなかなか解決の糸口が見出せない中、民間活力の導入の必要性が叫ばれ、住民・企業・行政が手を組んで、地域の活力を再生する運動が起こったのである。

西神楽では、いち早くこの手法を取り入れた活動を展開するために、平成13年に「NPO法人グラウンドワーク西神楽」が設立された。この団体の活動で最も成功したのがパークゴルフ場の造成だ。きっかけは、地元の高齢者から上がった、西神楽を流れる美瑛川の河川敷にパークゴルフ場をつくって欲しいという要望。「グラウンドワーク西神楽」のコーディネートのもと、住民と地元企業、旭川市がパートナーシップを組み6年間の歳月をかけ、36ホールのパークゴルフ場を完成させたのである。造

成は全て住民の手づくり。当然、自分たちのパークゴルフ場だという愛着が沸く。それはこんな形で実を結ぶ。平成22年の大雨による大洪水で、このパークゴルフ場が全て土砂の中に埋まってしまった。復旧は極めて難しいと思われた。しかし、住民パ

ワーは、何と全ての土砂を取り除き、元の美しい芝生のパークゴルフ場に再生したのである。ここまでやり遂げた住民の大きな自信は、地域づくり全体への強い熱意をもたらすことになった。

こうして地域づくりへの住民の気運が盛り上がりつつある中、平成25年、グラウンドワーク西神楽など様々な団体が参加して「西神楽エコ農村共生対流推進協議会」が設立された。この協議会は、各団体の活動をマネジメントして発展的な取組を

行うもの。地域づくりを支援する農水省の事業などを活用し、いよいよ冬季集住・二地域居住の活動をスタートさせることになったのである。

### 楽しさと安心をもたらす 冬季集住・二地域居住

西神楽は旭川の都市部に近いこともあり、高齢者などの流出が激しい。人口減少が続く中、住民からこのような声が聞かれ出した。「子どもの所に移り住んだあのじいさんもあのばあさんも直ぐに元気をなくし、亡くなってしまうぞ」。子どもたちの所に転居した高齢者が、次々と亡くなる現象が起こったのである。その原因は急激な生活環境の変化ではないか。話し相手もいなくて、やることもなく、元気をなくしたのではないか。そ



安心で快適な冬季集住



冬季集住を行う住宅

冬季集住は一人暮らしの高齢者が4人1組になって、冬期間修繕した空き家で生活するもの。協議会が中心となり、昼と夕方の食事の宅配サービスや病院、買い物などの送迎サービスも行う。この取組には、様々なノウハウが隠されている。例えば、空き家で暮らす4名の選別

う考えた住民たちの間から、地元で長く暮らす仕組みとして、冬季集住のアイデアが生まれたのである。高齢者にとって一番の大敵は冬の生活だ。除雪も大変で、雪に閉ざされて外出もままならず、寂しく暮らす人が多い。冬を楽しく過ごすことができればこの地にとどまれる。冬季集住のアイデアを実現するため、協議会は、例によってグラウンドワークの手法を取り入れ、平成21年プロジェクトをスタートさせたのである。

予期しなかった嬉しい出来事もあった。取組の最中、マスコミの取材も多く、何回かメディアでも放映されたが、これが西神楽全体にこの取組を浸透させる効果を生んだ。そして、住民の間で、このような取組を行う西神楽に誇りを持つようになってきた。これは、メディアの力が大き

だ。なるべく相性の良い人たちを集めるように工夫している。このような配慮もあり、参加者はみんな和気あいあい。厳しい冬を楽しく過ごすことができた。参加した18名からの感想を拾うと、「除雪から解放された」、「食事の提供もあり、共同生活はとても安心」、「離れて暮らす子どもたちも安心してくれる」など非常に好評。またやって欲しいという声が続々、1年目の試行実験は大成功に終わった。

この冬季集住の取組を継続的に行うための仕組みが二地域居住である。これは夏季（5月～10月）に冬季集住に利用する空き家を本州からの旅行者や営農希望者などに貸し出すもの。利用者には、北海道の清々しい環境で、菜園での作物づくりを行うなど農に触れてもらい、ゆっくりと過ごしてもらおう。まさに、本州の都会では味わうことので

かった。それだけではない。地元企業が冬季集住を行っている住宅の除雪を手伝ってくれたり、近隣の住民がおかずを持って訪問してくれたりと、皆で取組を盛り立てようという意識が広がったのである。現在は利用する空き家が4軒に増え、カラオケあり、飲み会ありの冬の楽しい生活が今も続いている。



多くの人で賑わう「ホテル祭り in 西神楽」



冬季集住では送迎も行う

きない潤いある生活だ。この取組によって、空き家は1年を通じて活用することができる。また、利用者からもらう家賃収入で、冬季集住の必要経費を補填。冬季集住の利用者は、1日1,000円の負担で済む仕掛けだ。

募集は、HPなどを通じて行っている。これまで、神奈川県の家など、全国各地から訪れている。利用者は、家庭菜園でトマトやキュウリなどをつくり、本物の野菜の味に感動。特に子どもたちは自然のテーマパークにいるようで、虫取りや魚すくいに泥だらけになりながら刺激的な毎日を通す。また、時間を見つけては近くの農家に援農に行くなど、住民との交流も楽しんでいる。協議会も利用者とはほど良い距離をとりながら、時々様子を伺い、心のおもてなしをしている。

最近では、人材派遣会社が宿舍として利用。ドイツや沖縄、千葉などの出身者を雇用し、この空き屋に滞在させ、富良野や美瑛の農家に援農支援員として派遣している。

**持続できる地域を目指して**

冬季集住・二地域居住の取組は全国から視察が絶えない。人口が減り続ける中、農村の暮らしをどう維持していったら良いかのヒントを皆探しているからだろう。この取組は、空き家というこの地域でも起こっている問題を逆手にとって、価値ある資源にしているものだ。そして、住民の意識も確実に変わってきている。住民が様々な取組に主体的に関わることで、西神楽を何とか活性化していこうという気運になってきている。西神楽



西神楽の4つの地区

にある4つの地区の内、パークゴルフ場は瑞穂地区、冬季集住は聖和地区であるが、他の2地区からは自分たちの地区でも何かやってくれという要望も多くなってきた。4つの地区の住民感情をうまくリードしながら数々の活動をマネジメントしている「西神楽エコ農村共生対流推進協議会」。この協議会のやり方がとても上手いのだろう。

これからも、協議会は住民のかゆいところを見逃さずことなく、ポイントを外さない活発な活動を展開していくことだろう。

## 地域リーダー からのひとこと

皆が誇りを持てる地域を目指して

西神楽エコ農村共生対流推進協議会 事務局長 谷川 良一

### 住民参加型から行政参加型へ

住民参加というのは、取り組みの主体が住民側ではなく、行政などが先導して取り組むことになるため、最後まで地域の自主自立が図られない懸念がある。よって、当地域では、住民が主体的に考え、まずは失敗してもやってみようという意気込みで地域づくりに取り組み、逆に行政が後から参加してくるような地域づくりを目指している。例えば瑞穂会館の建設では、まず瑞穂地区の住民が出資し、足りない分を行政が協力するという形で完成させたものである。このことは、一般的に行政への要望が先にあるという手法と逆のアプローチであり、このことが住民の意識醸成につながるようになる。

### むらづくりの合意形成の方法

住民たちの意向をきめ細かく調査して、優先順位を決めて取り組んでいる。意向調査は、通常は世帯ごとのアンケートなどが一般的であるが、世帯の構成員ごとに希望や考え方が異なることから、一人一人個別に聞き取り調査を行っている。その中で浮彫りになった要望や各住民たちの実情を踏まえて具体的な取組を決め、市民委員会（町内会の集り）などにおいて合意形成を図り実施している。また、老人会や町内会、市民委員会など地域の実情に精通している団体に協力してもらい、必要な経費を手当てするなどして、意欲的に各調査や取組を実施するよう仕向けている。アンケート調査なども、郵便局に郵送してもらうのではなく、市民委員会などにアンケート1部につき



地元の女性グループが朝市を運営



住民が出資して建てた瑞穂会館



プロジェクトマッピングが美しいウインターサーカス



高齢者に好評のヘルスツーリズム

200円を支出して回収してもらおうなど工夫をされており、回収率は95%以上に達している。このように記載方式のアンケート調査や個別の聞き取り調査などを積み上げること、住民の性格や実情を把握することが可能になり、取組に際する合意形成を容易にしている。

### 食・医・エネルギーを賄う

#### 持続可能な地域へ

安全・安心な暮らしを確保し、移住者にとっても魅力的な地域をつくるために、環境保全型の農業を広げていくとともに、旭川医科大学に近いという立地を生かし、医大と連携したヘルスツーリズムの取組も進めている。ヘルスツーリズムは、健康の回復・維持、疾病予防を主眼に置いた観光で、ウォーキングや農業体験などもメニューの一つである。これらのメニューを組み合わせたプログラムが健康にどのように寄与するのか。医大の協力を得て研究している。また、エネルギー

の分野では、太陽光を活用して地域内のエネルギーを確保する取組もスタートしており、住宅の電気を太陽光発電で賄うのみならず、農業用施設の照明への供給にも着手したところである。

### 「ないものねだり」から

#### 「あるもの探し」へ

さと川パークゴルフ場は美瑛川の河川敷の利用であり、冬季集住は空き家の活用、雪の固りにプロジェクトマッピングを施すイベントのウインターサーカスは雪の価値の再発見である。地域づくりは、住民たちが自分たちの地域に誇りを失い、他の地域をうらやむような気持ちを持たないよう、そこにあるものを価値あるものとして再発見するよう促していくことが土台であると考えられる。このことで、住民が自分たちの地域に愛着を持って、地域を良くしていこうという機運につながる。自分たちの地域の**場所の力**を信じて・・・



谷川 良一さん

斬新な発想で地域づくりをコーディネート。そこには将来を見据える戦略が息づく。



太陽光パネル



## 農村の魅力ある資源を活かしたフットパス

### 黒松内町農山村資源活用地域協議会（黒松内町）

酪農を中心とした農業と林業を基幹産業とする黒松内町。

自然と農業の美しい景観を活かしたフットパスの活動が盛ん。

全道のみならず、日本各地からフットパスを堪能したい人たちが訪れる。

#### 「ブナ北限の里」黒松内

高さ30m、太さ1mを有するブナの巨木に目を見張る。ブナ北限の地で知られる黒松内町では、身近にその雄大な原生林を眺めることが出来る。歌才地域のブナ林は天然記念物に指定されている。大正13年、調査員として訪れた林学者の新島善直博士は、「かくのごとき原生林を残留せるは奇跡というべし」と称え、スラリと延びた幹の上に広がる枝葉を「北のヤシの木」と評した。

歌才ブナ林は、2度の伐採の危機を乗り越えてきた。1度目は太平洋戦争末期。国内物資が不足する中、飛行機のプロペラ材としてブナが伐採されそうになった。それを阻止すべく北大の教授が北限のブナの学術的価値を強行に訴え、計画は中止に

なった。2度目は昭和29年。当時の村が、財政赤字を解消する切り札として、歌才ブナ林の天然記念物の解除に動こうとした。その時、地元有志が立ち上がり、各方面にブナ林の恒久保全を訴える嘆願書を送り、指定解除が免れたのである。こうして、ブナ林は学術的にも価値ある町のシンボルとして今に引き継がれているのである。

ブナ林を中心とした豊かな自然環境と酪農などの牧歌的な農村風景。このヨーロッパの雰囲気漂う黒松内は、通過型ドライブ観光がほとんどだった。もう少し滞在して、町の良さを知って欲しい。「歩く」スローな視点から町の自然や環境の素晴らしさを満喫して欲しい。そんな考えから、町は「フットパス」に目をつけたのである。



イギリスで本場のフットパスを体験

## イギリス発祥のフットパス

イギリスでは、市民が農地の中の小径を楽しそうに歩く姿を良く目にする。イギリス全土に編み出のように張り巡らされているフットパス。これは、市民が自然の中を自由に歩きたいという願いが生んだ歩行者専用道路だ。18世紀後半の産業革命の時代。大農園主が農地の規模拡大のため、私有地を囲み自由な出入りを禁じた。これに対抗した市民が、自由通行権要求運動を行い、「歩く権利」を勝ち取ったのである。現在、イギリス全体でフットパスの総延長は22万kmを超え、と言われている。幾つもの町や村、森や川、海岸線を巡る大規模なものから、一つの地域を歩く短いものまで、様々なコースがある。市民は、途中にあるパブで休憩し、地元の食を味わい、地域の歴史や文化、風

景をゆっくりと楽しんでいる。

### フットパスを

#### 地域づくりの中心に

フットパスの取組を進めるには本場イギリスに学ぶべきだ。こう考えた町は平成16年、職員と町民有志がイギリスに飛んだ。実際にイギリス現地で見ると、フットパスの素晴らしさが実感できた。でも、その当時、町内ではフットパスという言葉すら知らない人が多く、認知度がとても低かった。そこで、町はスタッフを募集し、フットパスの取組をささげるボランティア組織を立ち上げたのである。そして平成20年。都市と農村との交流などを進める農水省の支援事業を活用し、ボランティア組織とともに、行政など様々な組織が入り、「黒松内町農村資源活用地域協議会」を設

立。フットパスの活動は一気に加速化した。協議会のメンバーは、皆やる気満々。林道を中心としたルート選定や除草作業、案内看板・道標の設置、休憩用ベンチづくり、コースマップの作成など、精力的に活動した。そして、フットパスに詳しい講師を招いて勉強会を重ねるなど、ノウハウを蓄積したのである。現在は、それぞれに特徴を備えた5コースが整備され、子どもからお年寄り、障害を持った方など、多くの人たちがスローな風景を楽しむ。実際に歩いてみると、ブナ林の澄んだ空気感と小鳥のさえずりが心地よい。そして、ブナ林を抜けると、パノラマに広がる草地の風景に圧倒される。確かにスローな時間は気持ちのよいものだ。

途中にある農家やお店で休憩し、黒松内産のチーズやハム、ソーセージなどを味わい、町の人た



参加者はコースの途中にあるお店や農家で休憩し、黒松内産の農産物を味わう

ちと交流するのも楽しい。

いろいろな効果が

期待できるフットパス

一般的に観光は、「入込客数」で評価するが、フットパスなどのウォークツーリズムと評されるものは「時間」で評価する。従来の観光では、1ヶ所あたりの滞在時間は30分〜1時間程度。ウォークツーリズムは、スローなアクティビティであるため、滞在時間は大幅に延びる。仮に1日50人が訪れてフットパスを楽しんだ場合、従来観光の1000人に匹敵するのだ。

また、フットパスのメリットは、初期投資がそれほどかからないこと。まさに、町の資源をそのまま利用できる。そして、訪れる人たちに、町の特産品や特色ある料理などを効果的にP

Rすることで、町の魅力を発信できる。その一方で、フットパスでお金を取ることが難しいため、協議会の運営が大変。草刈りなどの維持管理もかかる。また、普段からあまり歩く習慣のない町民に歩いてもらう仕掛けが必要などの課題もある。

さらなる発展した

活動に向かって

これからは、単に交流人口を増やすのではなく、滞在時間を増加させる工夫が必要。そして、町内の特色ある食や温泉、農産物直売所、オートキャンプ場など、町の様々な資源を有機的に結び、訪れる人たちからお金を得て、また、リピーターになってもらえるようなフットパスの魅力アップが大切だ。協議会メンバーの団結力と斬新な発想が黒松内のフット

パスに付加価値を与えていくことだろう。



事務局からの  
ひとこと

黒松内の最高の自然に浸って欲しい

黒松内町農山村資源活用地域協議会 事務局 小菅 康一

黒松内町の宝、ブナ

黒松内町は人口3千人の町です。人口は減少傾向にあり、将来町が存続できるか危機感を持っています。しかし、そんな黒松内にも、世界に誇れる自然、ブナ林があります。黒松内はブナに囲まれた町と言ってもいいくらい、町民にとってブナは身近な存在なのです。しかし、住んでいるとなかなかその価値に気がつきません。そこで、フットパスをゆっくり歩いてブナに囲まれた自然を体感して欲しい。町民も訪れる人たちにも黒松内の良さを知って欲しい。そんな強い思いを、持ちながら協議会のメンバーは活動しています。私もフットパスの取組に関わるようになって、黒松内の美しい景観や豊かな自然を改めて感じる事ができるようになりました。

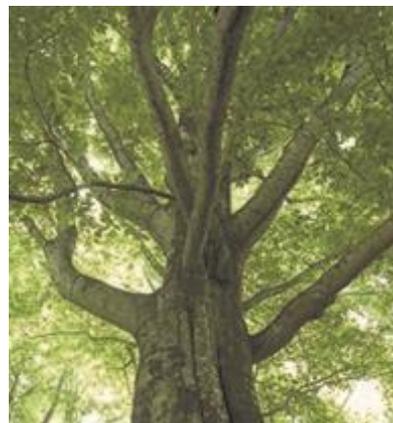
美しい風景や食を楽しむ

フットパス

失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す「日本で最も美しい村」連合。この考え方に共感し、町は当連合に加盟しました。美しい景観と自然を守ることはフットパスの決め手です。協議会としては、北海道森林管理局などと連携して、ブナの苗木の栽培や植樹などの啓発活動を行うなど、ブナの保全にも積極的に取り組んできました。また、町民へのフットパスの浸透を図るため、イギリスから講師を招いて講演会を開催したり、景観の専門家との勉強会を設けるなど、様々な手を打っています。しかし、なかなか自然や景観を守り、フットパスにも関わろうという意識の醸成



フットパスの専門家を招いて研修



ブナの巨木



フットパス全道交流大会



は簡単ではありません。そこで、町内の各地区にキーパーソンとなる人材をつくり、その方を中心として子どもたちへの出前授業を行ってもらうなど、工夫しているところです。

### フットパスのこれから

町を訪れる人々からは、「他の町にはない落ち着きがある」という言葉がしばしば聞かれます。このような声に励み、町民たちが自分たちの町を誇りに思えるような地域にするために、町民との協働の下、統一感のある美しい農村景観やブナを中心とする個性的な自然に磨きをかけていっています。

また、町民や黒松内に訪れる人たちに、フットパスへの魅力を感じてもらい、また、歩きたいと思ってもらうためには、まず、町民に自分が住んでいるこの町に対して誇りと愛着を持ってもらうことだと思っています。

そのためには、町の自然や歴史などの

素晴らしさを知ったり、学べたりする機会をもっともっと増やしたいと思っています。そして、想いを持った町民の皆さんと一緒に、黒松内ならではの食や文化を作り上げること。そこでフットパスが、黒松内の美しい景観や豊かな自然、床しい歴史、価値ある文化、個性的な食、魅力的な各種施設を有機的につなげる背骨になれば、町全体の活性化の取組に発展することになると強く感じています。

フットパスが他の地域にはない一つの文化にまで高まることを期待してやみません。



小菅 康一さん

黒松内町の若手職員のリーダー的な存在。  
黒松内町の魅力発信に思いを込める。



フットパスの途中で地元ハーブの会のお茶を楽しむ参加者

協力いただいたネットワーク  
組織からのひとこと

住民による誇りある農村づくりに向けて

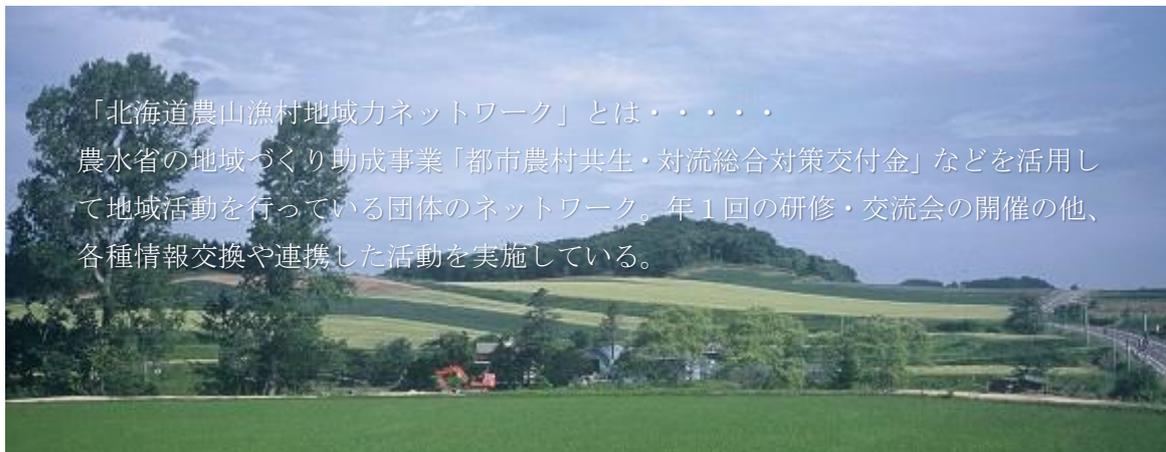
北海道農山漁村地域力ネットワーク 代表 目黒英治

日本全国で、人口減少の問題が大きくクローズアップされる中、農村に暮らす人たちは、将来への不安をかき立てられています。しかし、北海道の農村には、五感を刺激する魅力的な資源である自然や風景、歴史、文化、そして忘れてはならない先人たちの精神があります。

住民は、このような資源を有する農村に誇りを持ち、これら価値ある資源を絶やすこと無く、次世代に伝えていくための努力が必要であると思います。

この事例集は、農村の維持・活性化に向けて熱い思いを持ったリーダーたちが、試行錯誤をしながら様々な困難を乗り越え、農村づくりを行ってきた軌跡です。

行政の関係者を含め、多くの人たちにこの事例集を読んでもいただき、少しでも北海道内の各地に、住民が主体性を持った誇りある農村づくりが広がっていくことを願うものです。



「北海道農山漁村地域力ネットワーク」とは・・・・・・  
農水省の地域づくり助成事業「都市農村共生・対流総合対策交付金」などを活用して地域活動を行っている団体のネットワーク。年1回の研修・交流会の開催の他、各種情報交換や連携した活動を実施している。



オニヤンマ

---

2016年3月15日発行

---

制作・発行：北海道農政部農村設計課

---

協力：北海道農山漁村地域力ネットワーク

---